教育・研究等業績一覧

履　　歴

フリガナ	ホサカ　　カズタカ	性　別	生年	１９７７年
氏　　名	保坂　　和貴	男		
所　　属	保育学科	身　分	助教	

学　　歴

年　　月	事　　項
2002年3月	慶應義塾大学　文学部　人間関係学科　人間科学専攻　卒業　人間関係学士
2003年3月	慶應義塾大学　教職特別課程　修了
2003年4月	北海道大学大学院　教育学研究科　修士課程　入学
2005年3月	北海道大学大学院　教育学研究科　修士課程　修了　教育学修士
2005年4月	北海道大学大学院　教育学研究科　博士後期課程　入学
2011年3月	北海道大学大学院　教育学研究科　博士後期課程　単位取得退学

職　　歴

年　　月	事　　項
2003年10月	北海道大学　ティーチングアシスタント　「基礎演習（発達心理学）」（2004年2月任期満了）
2006年4月	北海道ハイテクノロジー専門学校　保育福祉科　非常勤講師　「乳幼児心理学」「家族援助論」「教育相談」「卒業研究」（2011年9月任期満了）
2006年4月	近畿大学九州短期大学　通信教育部　非常勤講師　「乳幼児心理学」「人間関係」「総合演習」　（2011年9月任期満了）
2007年4月	北海道ハイテクノロジー専門学校　視能訓練士学科　非常勤講師　「人間発達学」　（2011年9月任期満了）
2008年10月	北海道大学　ティーチングアシスタント　「英語演習（中級）」　（2009年3月任期満了）
2009年9月	拓殖大学北海道短期大学　保育科　非常勤講師　「教育心理学」　（2011年3月任期満了）
2011年4月	北海道ハイテクノロジー専門学校　こども・こころ学科　非常勤講師　「発達心理学」（2011年9月任期満了）
2011年4月	拓殖大学北海道短期大学　保育科　非常勤講師　「保育の心理学Ⅰ」「教育方法」「保育内容研究Ⅳ（こどもの言葉）」（2011年8月任期満了）
2011年9月	拓殖大学北海道短期大学　保育科　助教　（現在に至る）

教　育　業　績

1　担当授業科目（2015年度）

科　目　名	出講場所	期別	曜日	時限	備　考
〔保育学科〕					
保育の心理学Ⅰ	302	前期	金	1	
保育の心理学Ⅱ（A・B）	202	後期	月	2・3	
教育方法（A・B）	302	通年	金	3・4	
教育心理学	302	後期	金	1	
保育内容研究Ⅳ(A・B)	203	前期	月・火	3・4	
基礎科目入門	204	通年	火	2	
保育実践演習	102	通年	火	3	
総合芸術・総合芸術表現		後期	月・金	5	
保育実習指導Ⅰ・教育実習指導（1年）	101	通年	水	1	
保育実習指導Ⅰ・教育実習指導（2年）	101	通年	水・水	3・4	
保育実習指導Ⅱ・保育実習指導Ⅲ（1年）	101	後期	火	4	
保育実習指導Ⅱ・保育実習指導Ⅲ（2年）	101	前期	月	5	
〔農学ビジネス学科〕					
心理学	302	前期	水	4	

2　現行授業の目標と教育効果及びそれに対する自己評価 （記述式：900 字以内）	授業全般については、学生が心理学や保育・幼児教育における既存の理論・知識・技術を覚えることのみならず、それらを子どもをはじめとした人間の心理、保育・幼児教育の現場の事象に適用し、思考し、実践できるようになることを目標としている。そのため、以下３点に留意して授業を進めている。①基本的な理論や知識を保育や幼児教育の現場の事象に具体化して説明すること、②基礎的な心理学実験やグループワークを取り入れた学生参加型の活動を展開すること、③単元終了ごとの確認問題、およびリアクションペーパーの作成によって理解度・達成度を把握すること。主に、「講義→実践→（自己）評価」というサイクルを通して、理論や知識・技術のインプット（覚える、記憶する）とアウトプット（表現する、実践する）の両輪をバランスよく学ぶことを意図している。 講義科目については、アカデミックスキルの獲得を目指し、ノート作成の技法やメモの取り方などの指導を含めた授業を展開している。ノート作成・メモの取り方が授業内だけで完結するのではなく、後の自己学習へとつながっている学生が散見されるようになってきた。「学び方」を学ぶことにつながっており、今後も力を入れていきたい。また授業改善アンケートにおいて、「説明は分かるが考えてみると難しい」という回答が増えているが、心理学をはじめ学術的課題を伝えることができているのではないかと考える。大学生の学びの力として「メタ認知的能力」、「客観的・相対的視点の育成」は基本的な事項であると考えているため、次年度も、学術的な質を維持しつつ、具体性を意識して説明を行ない、具体−抽象の往還のなかで授業を進めていきたい。 演習科目については、学生の主体的な取り組みを促すことができるよう、PBL（問題解決型学習）などを取り入れて授業を進めているが、次年度はより保育現場の問題に即した課題を取り上げる予定である。
3　学生による授業評価も踏まえ、教育改善への取り組み （記述式：900 字以内）	H26 年度（後期）は、「教育方法」を保育実践やワークショップ、プレゼンテーション等を行なう参加型授業、「教育心理学」をノート作成等の学習方法そのものを学ぶための講義形式の授業として、「保育の心理学Ⅱ」を保育現場で生じる事象の事例検討（ケースカンファレンス）を行なう授業それぞれに異なる方法で展開した。昨年度は若干改善されたものの、例年通り同一教員による同時期の心理系科目の授業のため、学習内容の理解の際に困難が生じている現状にある。次年度は、保育現場により即した PBL 型の授業、講義、ケースカンファレンス、と授業展開方法によって科目間の差別化を一層明確にしたい。 授業改善アンケート（「教育心理学」）によれば、35 名が「理解しやすい」（64 名中）と回答しているものの、21 名の学生が「どちらともいえない」と答え、「説明はわかるが、内容が難しい」などの記述が多く見られている。この結果は学問に対する感受性を育成できた結果ではないかと考えている。学問上の専門用語や原理・法則等は、常識と必ずマッチするとは限らず、一読や一見して平易に理解できるものではないものも多くある。学術的な課題を踏まえたうえで、それを思考する力は今後より一層求められるべきであり、対処療法的なものではなく、本質的な思考を引き出したいと考える。 また、教育心理学や学習研究では、近年ワークショップなど学生が主体的に活動を組織することで学んでいく営みを重視する傾向にある。学生参加型の授業は、指導や管理を徹底すれば学生自らが活動する自由度が少なくなり、一方で学生のみで活動していくと自由放任になる、という難しさがある。学生の学習意欲を喚起するためには、学生の理解度に応じて適切かつ本質的な課題を設定することが重要であるため、今後の授業のなかで課題を実際に実践し、精緻化していきたい。
4　教科書、教材の作成状況 （記述式：300 字以内）	特定の教科書は使用せず、科目ごとにレジュメ・プリントを作成し授業を行った。とりわけ心理学系の科目においては、平易な心理学実験を取り入れ、グループ活動等が行えるように配慮した。 実習関連科目については、複数の教員による分担展開となっているため、現在実習に関するガイドラインを作成中である。
5　学生の指導（課外活動・厚生補導等） （主要 10 件以内）	
6　その他 （主要５件以内）	

研　究　業　績

1　研究分野・活動 （記述式：350 字以内）	研究分野：人間の学習・発達過程の研究（子どもの社会化を中心として） 幼児期の子どもの「遊び」や「いざこざ」といった日常的な出来事を対象として、それがいかなる学びの場・発達の場を拓くものなのかについて理論的・実証的に研究を進めている。とりわけ、人間の学びと発達を支える情動や意欲、身体的な経験、および仲間関係の重要性について焦点を当てている。幼児期は、大人になると内化され見えなくなる情動や意欲のあり方が、身体的なふるまいとしてあるいは言葉として外的に豊かに表現される時期である。また、子ども同士のかかわりには、大人が簡単には達成できないような個をも集団をも生かそうとする力動的な関係の仕方が存在する。このように、大人への過渡期として子どもを見るのではなく、人間存在にとっての心理のあり方、人間関係のあり方の本質を捉えるために、子どもを対象として研究を行っている。
2　研究課題 （今後の展開・可能性を含む） （記述式：350 字以内）	子どもであれ、大人であれ、人間（の心理）が変化する際には何らかの共通する過程と原理が存在すると考えられる。それゆえ、これまでの幼児期の遊び・いざこざの研究に加え、ミュージカル活動における学生の学び・発達、あるいは演劇における身体表現活動を研究することによって、人間（の心理）の変化の過程と原理を解明したい。現在は、理論的枠組みとして、ヴィゴツキーの心理システム論（知覚・記憶・思考・情動・意欲といった心理機能間のシステム変動として発達が生じるという理論）の考察をすすめている。人間の心理のシステム性は、社会的な活動のなかで、言葉や道具を介して人びとが関係することを通して変動していく。その心理の発達的変化と社会的活動との関係性を、遊び・いざこざ・ミュージカルという具体的な活動から実証的に解明していくことが研究課題である。
3　研究助成等 （主要５件程度）	(1)文部科学省科学研究費 なし (2)学内 なし (3)学外 なし
4　資格・特許等 （主要３件以内）	中学校教諭１種免許状（社会） 高等学校教諭１種免許状（公民）

著書、学術論文、作品等の名称（主要 15 件以内）	単著共著の別	発行又は発表の年月	発行又は発表雑誌等又は発表学会等の名称	要　約
（学術論文）				
状況論的学習観における「文化的透明性」概念について：Wenger の学位論文とそこから示唆されること	共著	2004 年 6 月	北海道大学大学院教育学研究科紀要 93 号	本論文は、1990 年代教育心理学における学習論に新たな潮流（状況論的学習論）を生み出した Wenger について、その学位論文の検討を通して、Wenger の本意が何処にあったのかを明らかにしたものである。保坂は Wenger 学位論文の 6 章抄訳を担当するとともに、「正統的周辺参加」という概念が学習のあり方を示すものではなく、学習のあり方を分析するためのツールであることを論じた。（著者：伊藤崇・藤本愉・川俣智路・鹿嶋桃子・山口雄・保坂和貴（pp. 115-123）・城間祥子・佐藤公治）
Emergence of creativity in children's play fantasies an d world-making	共著	2006 年 5 月	Research and Clinical Center for Child Development (Graduate school of Education, Hokkaido University)	本論文は、2005 年度 S 市内の幼児教育施設において行われた参与観察データに基づき、幼児が共同遊びを通して「意味世界」をつくり上げていく過程について分析したものである。遊びの虚構的・想像的な意味世界は、具体的なモノの使用や身体的行為といった現実世界によって支えられていることを明らかにした。（著者：SATO Kimiharu, KASHIMA Momoko, HOSAKA Kazutaka, NAGAHASHI,Satoshi）

幼児の共同遊びの「ルール」に関する分析視座	単著	2008 年 6 月	北海道大学大学院教育学研究科紀要 105 号	本論文では、幼児期の子どもたちにとって、遊びのルールとは何なのか、それを子どもたちはどのように実践しているのかについて、理論的側面と実証的側面から論じた。理論面では、幼児の遊びのルールとは感情によって支えられた行為の方向づけとなる「言葉の体系」であることを指摘した。そのことをカルタ遊びの相互行為過程の分析によって実証的に検討した。
「創作ミュージカル活動」を通した学生の学習・発達過程に関する一考察	単著	2012 年 12 月	拓殖大学論集：人文・自然・人間科学研究第 28 号	本論文では、第 28 回拓大ミュージカル『ふたつの空』の活動への参加を通して、学生にどのような学習・発達が生じていたのかについて検討した。ミュージカル公演終了翌日に作成したミュージカル感想文を分析した結果、「ネガティブな感情体験を媒介とした自己変容」のストーリーが共通した記述スタイルになっていることが明らかになった。拓大ミュージカルは活動の過程で葛藤や困難に出くわし、それを乗り越えていく場になっていると考えられる。
「創作ミュージカル活動」における学生の学習過程に関する研究：「拓大ミュージカル感想文」の学年縦断的分析	単著	2014 年 3 月	拓殖大学論集：人文・自然・人間科学研究第 31 号	本論文では、「拓大ミュージカル」活動に 2 年にわたって参加した学生の感想文について比較分析を行なった。その結果、学生が経験する困難・葛藤の内容が、1 年次には未知の活動に従事することで生じるものであるに対し、2 年次には集団をまとめたり、1 年生に仕事の指示を出したりと、活動そのものを組織することから生じるものであることが明らかになった。
「パフォーマンス」の心理学に向けて：ホルツマン「パフォーマンス」論のワークショップ実践への適用	単著	2015 年 10 月	拓殖大学論集：人文・自然・人間科学研究第 34 号	本論文では、ヴィゴツキーから着想を得たホルツマンの心理学論に基づき、筆者が実践している「＜こころ＞と＜からだ＞をつなぐワークショップ」の理論的な意味付けを行ない、ワークショップにおける身体を用いたエクササイズの分析を行なった。
(学会発表・その他)				
園で幼児はいかに他児童間のいざこざに関与していくのか：幼児期の社会化プロセスの検討	単著	2004 年 10 月	日本教育心理学会第 46 回総会　発表論文集	4～5 歳の異年齢混合保育の園における自由遊びの時間に生じたいざこざを対象に、当事者以外の第 3 者がいざこざの展開にどのような影響を及ぼすのかについて検討した。その結果、幼児のみでいざこざが展開する場合、どちらか一方に「加勢」することが多いこと、保育者が介入する場合、第三者はいざこざの原因について情報提供を行うことが明らかになった。
幼児の協同遊びにおけるいざこざとルールの展開	単著	2005 年 9 月	日本教育心理学会第 47 回総会　発表論文集	4～5 歳児のいざこざについて廣松渉の「四肢構造論」に基づいて分析を行った。その結果、いざこざの当事者間では同一の行為や発話や出来事であっても相異なる意味を帯びていること、その意味の相違は当事者相互の役割意識の相違にあることを明らかにした（例えば、鬼ごっこにおいてタイムをするという行為は「鬼役として」は「不当」であり、「コ役」としては「妥当」である、というように）。
ヴィゴツキーからみた「遊び理論」の再構築(2)：「ルール遊び」の構造的特質と発達過程の微視的分析	共著	2006 年 3 月	日本発達心理学会第 17 回大会　発表論文集	本研究では、2005 年 5 月～2006 年 3 月 S 市内の幼児教育施設で行った参与観察データから「鬼ごっこ」の場面を抽出し、その活動がどのように発達していくのかについて、ヴィゴツキーの遊び理論に基づいて縦断的な分析を行った。その結果、子どもの行為は単なる「追いかけ」から「相手の動きの先読み」へ、目的（動機）は「追いかけること」から「捕まえること」へ発達することが明らかとなった。

幼児の遊び場面にける「ルール」の発生と展開	共著	2006 年 9 月	日本教育心理学会第 48 回総会　発表論文集	2006 年 3 月の日本発達心理学会発表に続き「鬼ごっこ」の発達について分析を行った。その結果、ルール認識の発達とルール実践の発達が時間的にずれること（前者が先）が明らかとなった。このずれが鬼ごっこの中での行為の発達を生むのではないかと考察した。
幼児期における「ルール遊び」の発達に関する研究：幼児の動機・行為・ルールに着目して	単著	2007 年 3 月	日本発達心理学会第 18 回大会　発表論文集	2006 年 3 月及び 9 月の学会発表に引き続き、「鬼ごっこ」の発達について分析を行った。その結果、「鬼ごっこ」の「おもしろさ」の内容が、遊びに参加する幼児の動機（目的意識）の変化、行動方略の変化、ルール理解の変化と相互に関連しあいながら質的に変化していくこと、それらの変化を通して「鬼ごっこ」という活動全体が発達して行くことが明らかになった。
幼児のいざこざにおける相互交渉過程の分析：身体配置に着目して	単著	2007 年 9 月	日本教育心理学会第 49 回総会　発表論文集	4～5 歳のいざこざの相互交渉過程について、そこで組織される身体配置に着目して分析を行った。その結果、対岸型（いざこざの当事者や第三者が向かい合う）の場合、互いに抗議し合うやりとりが展開すること、車座（当事者と第三者が円を描くように位置する）の場合、争点を解明するやりとりが展開することが明らかになった。いざこざ時の身体配置には相互交渉の質の違いが反映されていると考察した。
幼児期の共同遊びにおけるルール実践過程の微視的分析	単著	2009 年 3 月	日本発達心理学会第 20 回大会　発表論文集	幼児期の共同遊びのひとつである「カルタ遊び」を取り上げ、その遊びの相互行為過程でどのようなルールが創造され、共有されていくのかについて微視的分析を行った。その結果、幼児が遊び集団全体で喜びの感情を得られるように、ルールの創造、改変、共有を行っていくことが明らかとなった。
幼児のいざこざにおける相互交渉過程の分析（2）：身体動静に着目して	単著	2010 年 3 月	日本発達心理学会第 21 回大会　発表論文集	幼児のいざこざ場面におけるノンバーバルな身体的な行為に着目し、それがどのような「意味」を生み出す基盤となっているのかについて分析を行った。その結果、視線などの身体動静と言葉が指示する内容とが矛盾を引き起こし、対立を引き起こすことが明らかとなった。
創作ミュージカル活動を通した学生の学習・発達過程の分析（1）	単著	2012 年 11 月	日本教育心理学会第 21 回大会　発表論文集	論文『「創作ミュージカル活動」を通した学生の学習・発達過程に関する一考察』に基づき、第28回拓大ミュージカル『ふたつ空』への参加学生の学習・発達過程について分析し、研究報告を行った。
演劇的ワークショップによる保育実践力の養成について	単著	2015 年 9 月	全国保育士養成協議会第 53 回研究大会研究発表論文集	論文『「パフォーマンス」の心理学に向けて：ホルツマン「パフォーマンス」論のワークショップ実践への適用』に基づき、身体表現ワークショップが、保育士の実践力にどのように関連するのかについて検討を行った。

研究業績（過去３カ年分）				国際的活動の有無	社会的活動の有無
著作数	論文数	学会等発表数	その他		
0	2	2		無	有

学　内　運　営　業　績

1　役職、各種委員会等 （主要 10 件程度）	2011 年 9 月　～　現在	入試広報委員会　委員
	2012 年 4 月　～　20014 年 3 月	図書委員会　委員
	2014 年 4 月　～　現在	教務委員会　委員

学　外　活　動　業　績		
1　本学以外の機関（公的機関・民間団体等）を通しての活動 （主要 10 件程度）	2012 年 7 月	留辺蘂高校　出前授業
	2013 年 3 月	深川ロータリークラブ　講話（拓大ミュージカルについて）
	2013 年 7 月	旭川明成高校　進路講話（短期大学について）
	2013 年 9 月	旭川明成高校　出前授業（保育・幼児教育の仕事）
	2014 年 10 月	介護職員初任者研修（深川市商工会議所）　講師
	2014 年 10 月	旭川ふたば幼稚園研修会　講師（幼児のいざこざについて）
	2015 年 2 月	旭川商業高校　進路講話（保育・幼児教育の仕事）
	2015 年 4 月	幌加内高校　＜こころ＞と＜からだ＞をつなぐワークショップ：（ソーシャルスキル・トレーニングとして）
	2016 年 8 月	ふかがわプレーパーク　運営（2013 年度～）
	2016 年 1 月	深川西高校　保健講話（心の健康：2013 年度～）
2　学会･学術団体等の活動 （主要 10 件程度）	日本教育心理学会　会員	
	日本発達心理学会　会員	
	元気村地域づくり研究所　会員（事務局員）	
	深川市保健福祉施策推進協議会　委員（平成２４年度～）	
	ふかがわプレーパーク実行委員会　委員（平成２４年度～）	
	北海道保育実践研究会　会員（平成２７年度～）	